

もくじ

アメリカへと派遣された谷文晁の孫二世谷文一の肖像写真… P1

一対の庚申塔—西門寺・西光寺跡所在の庚申塔— … P3

足立史談

第647号

2022年1月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

アメリカへと派遣された谷文晁の孫

二世谷文一の肖像写真

小林 優



二世谷文一肖像写真 万延元年（一八六〇）日本カメラ博物館所蔵

谷文一

郷土博物館では、令和三年十月一日から十二月五日にかけて、谷文晁の孫として船津文淵ら足立の文人と親交を結んだ二世谷文一（にせいたにぶんいち、一八一四〜七七七）と、その同時代の文晁門下「谷派」の絵師たちに焦点を当てた特別展「谷文晁の末裔—二世文一と谷派の絵師たち—」を開催しました。

二世文一を中心とした展覧会は、全国的にも例のない試みであり、その反響として、会期中にも郷土博物館には二世文一や谷派の絵師たちに関する様々な情報もたらされ、さらに作品・資料の調査が進展していくこととなりました。

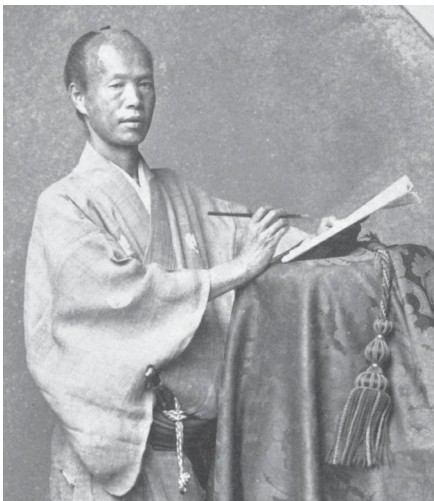
今回はその二世文一の調査の中から、万延元年遣米使節の一員としてアメリカに渡った際に撮影された、二世文一の肖像写真についてご紹介いたします。

■二世文一と万延元年遣米使節
文一については「谷文晁の末裔」展図録にてその詳細を述べていますが、改めて概観を紹介いたします。二世文一は谷文晁の養嗣子、一世谷文一（一七八六〜一八一八）の長男で、文晁にとつて孫に当たります。五歳で父と死に別れたことから、祖父文晁の下で幼少より画の研鑽を積み、「文権」、「文逸」、そして父の名を継承した「文一」と

雅号を変遷させました。

天保十一年（一八四〇）に文晁が没すると、文晁の実子、文二（ぶんにじ）が谷家の家督を継承するのに対し、二世文一は宮津藩主、本庄宗秀（ほんじょうむねひろ）で、一八〇九〜七三）に仕え、藩士として宮津藩（現京都府宮津市）へ拠点を移すこととなります。

宮津藩における二世文一の役職・立ち位置は、今日に残る「宮津藩政記録」（明治元年頃、京都府立京都学・歴史館蔵）に「拾人口給人格御次詰」と記録されるのみで、詳細は明かではありませんが、主君宗秀は、天保十一年に宮津藩六代藩主に就任して以降、幕府奏者番や寺社奉行などを歴任する幕政の中心人物の一人でした。そして、この宗秀の推挙により二世文一が加わったと推察されるのが、安政五年（一八五八）に締結された日米修好通商条約の批准書交換のため、その二年後に幕府がアメリカへと派遣した万延



「二世谷文一肖像写真」胸像部分拡大

元年遣米使節です。この使節団に、二世文一は副使である村垣範正の従臣の一人として加わりました。

使節団の一員に二世文一が加えられた具体的な理由は定かではありませんが、カメラの無かった当時、現地での出来事や文化風物を、絵師として絵筆でもって記録する役割を求められたのではと推測されます。

使節団は日本からホノルルを経由してサンフランシスコに至り、パナマを経てワシントンへ到着して、ブキャナン大統領への謁見と、批准書交換を果たしました。そして日本への帰路に着いて、バルチモア、フィラデルフィアからニューヨークを経て大西洋・喜望峰を越え、バタビア・香港を経由して横浜へと辿り着き、使節団としての旅を終えます。

この間、使節団は各地で様々な体験をしますが、本稿で紹介する「二世谷文一肖像写真」「前頁写真」は、

日本への帰路の途中、万延元年六月(二八六〇年旧暦四月〜五月)にアメリカ、ニューヨークで撮影されたものです。

■二世文一の肖像写真 「二世谷文一肖像写真」に写るのは遣米使節随行情、数え四十七歳の二世文一の姿です。腰に短刀を差し、左手に画帖を持ちつつ右手に筆を構えて、いかにも絵師然としたポーズで撮影されています。明治初年まで生きた二世文一の肖像を記録した写真は他に確認されておらず、これが現存唯一の肖像写真と言えます。

十九世紀の欧米社会では、幾つかの撮影・現像の技法がありました。この「二世谷文一肖像写真」は、ソルテッドペーパー(塩化銀紙)を用いた印画法(IIプリント技法)で像が写し出されたもので、縦二〇〇×幅一五・二センチメートルの楕円形の肖像写真が、縦三三・八×横二七・〇センチメートルの台紙に貼り付けられた状態と

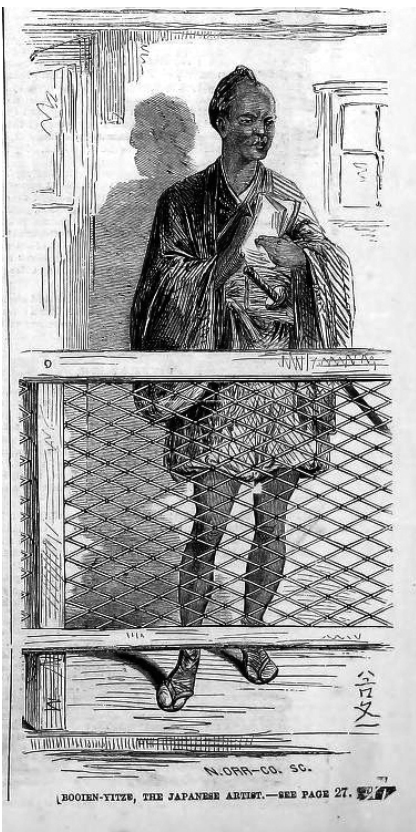


図1 “FRANK LESLIE'S ILLUSTRATED NEWSPAPER (1860年6月6日号)に掲載された二世文一の肖像画
https://archive.org/stream/franklesliesillu00iesl/

なっています。写真を囲む楕円線の下部周縁には「CHAS.D.FREDRICKS PHOTOGRAPHER 585 AND 587 BROADWAY NEW YORK」の文字が印字されており、この写真が、当時のアメリカを代表する写真家の一人、チャールズ・ドフォレスト・フレデリックス(一八二二〜九四)が、ニューヨークのブロードウェイに構えていた写真館で撮影したものであることを示しています。

さらに台紙には、左下部に筆による「谷文一」の字と、中央下部に「Tane Buénche Artish」の字が記されます。「Tane Buénche」は「谷文一」を英語表記したものと見られますが、注目すべきは、それと共に記される「Artish」の字です。「Artish」は恐らく「Artist(芸術家)」のことと思われ、ここで二世文一の立場が「Artist」であると表記されているのです。

台紙に記されたこれらの字が、どの段階で、誰によって記されたかは明らかではありませんが、当時、使節団が立ち寄ったハワイやワシントンの新聞でも、その描き方の紹介や、写生する二世文一の肖像図(図1)の掲載と共に、「二世文一を「An artist」と記した記事が見受けられます。二世文一自身が取材者や撮影者に自身の役割・肩書「Artist」と伝えていたのかは定かではないものの、少なくともその姿を取材したアメリカの人々が二世文一

を使節団随行の画家として認識していたことは間違いありません。この写真台紙の表記者が誰であるにせよ、やはり二世文一＝使節団中の画家(Artist)という認識があったことを、まず物語ると言えるでしょう。

また、これらの記述と共に、筆と画帖を構えた画家としての二世文一の姿を写すことが目的とされているこの写真は、二世文一が村垣範正の従者であるだけでなく、絵師＝記録者としての役割を帯びて随従していた人員である可能性を感じさせるものとも言えるのではないのでしょうか。

■万延元年遣米使節の写真 さて、万延元年使節は、ニューヨーク以前にも複数回に渡り肖像写真の撮影を行っています。ここまで述べてきた通り、この「二世谷文一肖像写真」は使節団が日本への帰路にニューヨークに立ち寄った際に撮影されたものであることは間違いありません。

この時、使節団はニューヨークで大変な歓待を受け、どのような行事に参加したかは、村垣範正をはじめとする使節各員の記録(阿部隆一編『村垣淡路守範正著 遣米使日記』(文學社、一九四三年)、『万延元年第一遣米使節日記』(日米協会、一九七七年)などに収録)に詳しく残されています。一方で、それらの記録のいずれにも、フレデリックスの写真館での肖像撮影の記録は確認することができず、この写

真がどのような経緯で、どのような目的により撮影されたのか、具体的な事情を窺い知ることはできません。

しかしこの時、ブロードウェイにて使節団メンバー個々人の肖像撮影が行われたのは確かかなようで、使節団に關する諸資料をまとめた『万延元年遣米使節史料集成』（風間書房、一九六一年）第七卷には、フレデリックスに撮影された使節団員の肖像写真が多く日本に持ち帰られ、伝来していることが記録されています。本稿で紹介した「二世谷文一肖像写真」は元々アメリカで伝えられ、その後、日本カメラ博物館の所蔵になったもので、国内では他に二世文一の写真は確認されていませんが、当時、同様の写真が他の写真と共に日本へと持ち帰られ、使節団と二世文一の活動を物語る記録となっていたことが考えられます。

郷土博物館では引き続き、足立ゆかりの人物として、二世文一の調査を行っていきます。さらなる進展があり次第、誌上等でご報告していきます。

【謝辞】「二世谷文一肖像写真」については、展覧会来場者の澤海典子様より情報をお寄せ頂き、調査に際しては日本カメラ博物館研究員、井椋直美氏にご協力を賜りました。ここに記し、御礼申し上げます。

(当館学芸員)

一对の庚申塔

—西門寺・西光寺跡所在の庚申塔—
関口 崇史

足立史談ではこれまで数多くの庚申塔が取り上げられてきました。今回は、舎人西門寺（舎人二二二一四）と西光寺跡（舎人五一一二一四）西門寺別院（安楽院）に所在する二基の庚申塔を紹介したいと思います。現在、西光寺の跡地には西門寺別院（安楽院）が建てられています。同庚申塔は西光寺に造立された庚申塔であり、また、本誌ではすでに西光寺跡所在の庚申塔として紹介されていたことを踏まえて「西光寺跡庚申塔」と表記します（安藤義雄「舎人・西光寺跡石造物調査」『足立史談』三六〇号、一九九八年）。なお、同塔は『足立区文化財調査報告書 庚申塔編』（一九八六年）では「舎人二二二一三 天神社」所在として紹介されています。これは、西光寺跡の敷地と天神社が隣



写真1 西門寺庚申塔



写真2 西光寺跡庚申塔

接していたためと思われる。
■西門寺・西光寺 西門寺は正式には菩提山龍寶院西門寺と号し、京都知恩院の末寺の浄土宗寺院です。創建は南北朝時代の永和三年（二三七七）と伝えられています。明治初年に廃寺となった西光寺は、正式には遍照山安楽院西光寺と号し、慶長七年（一六〇二）、運哲の開山として創建されたと伝えられる西門寺の末寺でした（『足立風土記稿』地区編四 舎人編、一一六―一二〇頁）。
■庚申信仰と仏教 庚申信仰は、中国の道教に基づく延命信仰で日本には平安時代に伝えられました。日本での同信仰の展開には、僧侶や修験者の寄与があったとされ、庚申の日に礼拝する仏教的要素が加えられました。庚申信仰のテキスト『庚申因縁記』では仏教に基づく庚申信仰の言説が展開されています。室町時代の庚申待板碑や江戸時代の庚申塔の主尊に仏菩薩が刻まれたのには、このような理由があったのです。
■庚申塔の造立 それでは江戸時代の人々は、なぜ、庚申塔を造立したのでしょうか。明応五年（一四九六）成立と考えられている『庚申因縁記』には、
夫庚申ト申ハ、一年二六度有也、彼庚申ヲ守ト申ハ、過去現在未来三世ノ徳也、先庚申ヲ守日ハ、心ヲシツメテ、申ノ刻ヨリ守ヘシ、（中略）又庚申ヲ守ル行人ハ縦ヒ重服ノ身ナリトモ、ケカレナシ、其日、精進ニテ可待一座ト云ハ、三年二十八度有也、十八度ヲ一度モ懈怠ナク守ラ一座ト云也、此一座ヲ守レハ、一切ノ願望、此内ニ成就セスト云事ナシとあり、「三年二十八度」（一年に庚申の日は六日なので、三年で一八回となる）を一座として、一座を滞りなく行なえば結願、諸願成就となると説かれています。区内の庚申塔の銘文に「爰結縁衆等毎年六度之待庚申祈現後二世悉地成就所也」（千住曙町 西光院所在庚申塔）、「奉供養庚申待三年二世悉地成就所」（扇 地藏堂所在庚申塔）とあるのは、一座結願成就のために造

立されたことを示しているのです。

■二基の庚申塔 それでは、西門寺・西光寺跡の庚申塔を見ていきたいと思ひます。

写真1は西門寺庚申塔、写真2は西光寺跡庚申塔です。いずれも、主尊である六臂の青面金剛が邪鬼を踏みつけ、頭上左右には飛雲に日月、足元に雄鶏・雌鶏、その下に三猿を配する同一形態の庚申塔です。

写真3・4は主尊部分を拡大したのですが主尊の比較からそのデザインも同一であることがわかります。

写真3 青面金剛 (西門寺庚申塔)



写真4 青面金剛 (西光寺跡庚申塔)



■造立者 造立者はそれぞれ舎人町の施主九七人(主尊左に銘文あり)で、造立者がわかる区内の庚申塔中最大の人数となっています。また、江戸後

期に幕府が編纂した『新編武蔵風土記稿』では舎人町の家数を九三軒としていますが、造立者数は舎人町の全軒数に近かったのかもしれない。

■造立年代 それぞれの主尊左に「□□壬午年十一月朔日(西門寺庚申塔)」「元禄十五年壬午年十一月朔日(西光寺跡庚申塔)」の銘文を確認することができます。残念ながら西門寺庚申塔は年

号部分が欠損してしま

すが、江戸時代、干支

が「壬午」の年は、寛永十九年(一六四二)、元禄十五年(二七〇二)、宝暦十二年(二七六二)、文政五年(一八二二)が該当しますので、このいずれかが西門寺庚申塔の造立年次となります。

■造立理由 西門寺庚申塔の造立年次は、同塔の造立理由から説明

することが可能です。多く庚申塔には「現当二世」「二世安楽」といった現世と来世の安楽を願う趣旨の銘文がありますが、西門寺庚申塔

は「奉彫建尊容現當得無比樂所(主尊右)」と青面金剛の尊容を彫建すること

で現当の無比樂所を得ることを願ひ、西光寺跡庚申塔では「奉造立尊像現後速受無比樂所(主尊右)」と彫建された青面金剛の尊像を造立すること

で現後速やかに無比樂所を受けることを願ったものと理解されます。本来「現当」とは「現世」と「当来」

のことであり、現世と来世を意味する言葉ですが、西門寺庚申塔の「現当」は現世であり、西光寺跡庚申塔の「現後」とは来世と推測され、舎人町の施主九七人は、現世と来世に

おける安楽を二つの庚申塔に分けて祈願したものと考えられます。このように造立理由を考えると西門寺庚申塔の造立年代が浮かび上がってきます。来世を祈願する西光寺跡庚申塔がさきに造立されたことは考えにくく、西門寺庚申塔の造立年次は西

光寺跡の庚申塔より早いか、同時期に造立されたと考えられます。元禄十五年より早い「壬午」の年は寛永十九年しかありません。しかし、寛永十九年の時点では、舎人は「舎人町」

成立以前の「舎人村」の時代でした。つまり、西門寺庚申塔は元禄十五年に造立された庚申塔であり、西光寺跡庚申塔と同時に造立された一対の庚申塔として造立されたものなのです。

■舎人町と赤山道 江戸時代の舎人

は、千住町とともに足立区内にあった二つの町の一つでした。

正保、元禄の国絵図などには舎人は「舎人村」と表記され、元禄十三年(一七〇〇) 鑄造の西門寺半鐘(登録有形文化財(工芸品))の「足立郡舎人町」、今回紹介の元禄十五年の庚申塔にも「舎人町」とあることから、遅くとも元禄末期(一七〇〇〜〇三)には舎人町が形成されたと考えられています(『足立風土記稿』地区編四舎人編、七九頁)。同庚申塔は、西門寺の半鐘とともに舎人町の存在を示す貴重な史料でもあるのです。

赤山道は関東郡代伊奈氏の赤山陣屋(埼玉県川口市赤山)を中心として各方面に結ぶ道の通称で、計四本の赤山道が確認されています。このうち、赤山と竹塚村増田橋間を結ぶ約5kmの赤山道のほぼ中間に位置したのが舎人町であり、赤山道に沿って左右に形成された宿場町が「舎人宿」でした。つまり、同宿場の両端に位置しているのが西門寺と西光寺だったのです。

舎人町の人々が造立した一対の庚申塔は、現当二世の願いを現世と来世に分けた非常に珍しいものでした。そして、舎人宿の両端に位置する西門寺・西光寺を造立場所に選んだのは、彼らが舎人宿全体の幸せを願ったためなのかもしれません。

(足立区文化財調査員)